

---

# 東方咎追録

蜘蛛の血

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方咎追録

### 【Nコード】

N3251R

### 【作者名】

蜘蛛の血

### 【あらすじ】

世の中には咎追いと呼ばれる仕事がある。

賞金首を機関に突き出して賞金をもらう、いわゆる賞金稼ぎである。その咎追いであるとある三人がい世界へ行ってしまっお話。

## prologue (前書き)

人形記とか書かないで何やってんだ。

更新はかなり遅めですが、読んでみていただければ嬉しいです。  
どうぞ

「で、あるからして。」

咎追いとしてはさまざまな経験が必要でござる。」

「は、はあ。」

「なるほどニヤス！」

此処は浪人街と呼ばれる町。

今ここでものすごくむさいおっさんが、マジシャンのような少年と、猫そのもののような少女にいろいろと教えている。

「だが、経験を積むといってもただやみくもに賞金首を捕まえればいいわけではないでござる。」

下手をすれば逆に返り討ちにあってしまふでござる。」

言っていることは正しい。  
だが、あまりのむささに真っ先に返り討ちにあいそつで説得力がない。

「では、これより修行をおこなうでござる。」

「はい、よろしくお願ひします。」

「組み手ニヤスカ！」

「いや、今回は組み手ではなく、心頭滅却修行をおこなってもらおうでござる。」

「しんとーめつきゃく？」

「えつと、心頭滅却すれば日もまた涼し。つまり我慢をする修行ですな。」

「そつでござる。」

この人なら暑さだけなら絶対に耐え切れそうである。

「だが、拙者として弟子たちにだけやらせるわけではないでござる。」  
(弟子になった覚えはないんですけど……)

「では、開始でござる！」

てな訳で、座禅を組み、周りを火の海にする。

「……」  
「ZZZ」

（ん？ 熱くなくなったでござるな。弟子たちは何をしているのか。）

急に熱がなくなった。

それどころか少し寒い。

（なるほど、暑さの次は寒さに耐える修行ですか。）

「寒いニヤス！」

「いったんやめでござる二人とも。」

何かがおかしい。」

「そりゃあ、これだけ静かだと変ですよ。」

「寒いニヤス！ ご飯が欲しいニヤス！」

「確かにそろそろ昼飯の時間でござるな。」

「やったニヤス！」

食事の時間らしいが。

「おい！ 我が部下たちよ。どこに行ったでござるかー！」

「……誰もいませんね。」

「……はーんー、まーだーかー？」

「仕方がないでござる。そこに湖があるから魚を捕ってくるでござる。」

数分後……

「遅いですね。バング先輩。」

「遅いニヤス。ハッ！ もしや、ご飯を独り占めしてるにやすか

！？」

「いや、それは……ってバング先輩ー！」

そこには湖に氷漬けで浮いているむさいおっさんがいた。

「夕方は泳げないニヤスよ。」

「僕もこんな冷たそうな湖入りたくないですよ。」

「……」

「どちらもそこまでむさいおっさんのことを心配してはいないらしい。」

「割りましようか。」

「どうやってにゃ？」

「石でも投げてみましょう。」

「了解ニヤス！」

つてなわけで石を投げまくって。

「この獅子神萬駆、一生の不覚！」

「そんなことよりご飯ニヤス！」

「おお、そうでござったな。魚はちゃんと取れてるでござるよ。」

「早く食べるニヤス！」

「ちよつと待つでござる。ちゃんと焼いて食べるでござる。」

ちよつとカルル殿、まきを拾ってきてほしいでござる。」

「わかりました。」

とりあえずまきを拾い、食事に取りつけた三人。

「ふう、おなかいっぱい大満足ニヤス！」

「ごちそうさまでした。」

「お粗末さまでござる。」

「ところで、此処どこですか？」

「カグツチに湖はないはずでござる。」

拙者やカルル殿、タオカカも移動術式やらは使えないゆえ。」

「異世界、ということになりますね。」

「異世界って何ニヤス？ 食べるニヤスか？」

「違いますよ。」

おかしな会話をしている彼らはこれからどうなるのか。

Prologue (後書き)

どうやって続けましょうか。  
それでは

フロストバイ・・・ト？(前書き)

かなり遅めの第弐話です。

どうぞ

フロストバイ……ト？

修行中になぜか異世界に来ていた三人。

とりあえず、その場を確認したところ、どこかの森らしい。

「湖があっただけ助かったでござるな。」

「そうですね。水があれば何とかありますから。」

「ZZZ」

猫の少女であるタオカカは空腹を満たし、昼寝をしている。ここは猫らしい。

「現在地がつかめないでござる。とりあえず誰か人を探さないといけないでござるな。」

「でも、ばらばらに動いては迷子になってしまいますよ。」

「そこら辺は考慮しているでござる。一応みんなと一緒に行動して見つけろそうになれば、ばらばらに行動をするでござる。」

「結局変わらないんじゃない……」

「ってことで、行くでござるー」

「ギニャー！」

タオカカをたたき起していざ出発。

約一時間後……

「見つからないですね。」

「そうでござるな。一応まっすぐ進んでいるでござるが、森から出れる気配すらしないでござる。」

「ニヤス〜。」

唯一楽しんでいるタオカカも萬駆とカルルにしては気楽なだけである。

「こうなったら、当初の予定通り、ばらばらに動くでござる。」

「わかりました。」

「了解ニヤス！」

「つとと、ちょっと待つでござる。二人とも、これを持っていくでござる。」

「これは……なんですか？」

「これは、狼煙でござる。人を見つけたらこのひもを引っ張って地面に指すでござる。」

そうすれば煙が出てほかのメンバーにも知らせることができるでござる。」

「なるほど。」

「わかったニヤス！」

なんだかんだで結局ばらばらに行動することになった。

side 萬駆

「どうしてこうなったでござるか？」

萬駆は最初の湖付近に戻ってきていた。

「だが、水の近くには人が集まりやすいでござる。」

ここで待っていてもよかったかもしれないでござるな。」

いまさら言っても仕方がないことではあるが、一応湖付近を散策することにした。

「少しではあるが、人の気配がするでござる。」

流石忍者というべきか気配を感じる力は長けている。

「何をこそこそと隠れているでござる！ 拙者に用があるなら出てくるでござる！」

隠れた気配に激を飛ばす。

そうすると……

「！ 後ろにとっ！」

氷でできた剣が飛んできた。

「まさか、いや、そんなはずはないでござる。まさかこんな所にジンキサラギがいるわけ……」

「あー！ よけたなあ！」

「子供でござったか。」

攻撃が飛んできた方を見ると、氷のような水色の髪に青を主体とした服を着た少女がいた。

「ただの子供だと思っなよ。アタイ幻想郷でさいきょー何だかなー！」

「この世界は幻想郷というのでござるか。」

「とにかく、アタイの攻撃を避けたからには覚悟しろよ！」

「むむ、雲行きが怪しくなってきたでござる。」

「いづくぞー！ 新技アイシクルソード！」

少女はさつき飛ばした氷の剣をハンドサイズにして構えた。

「さつきのはやはりお主の仕業であつたか。」

少々おいたがすぎるでござるよー！」

萬駆は腕に火をともし、腰を落として構えた。

「いづくぞー！」

自称最強少女は剣を構えて飛び込んでくる。

「肉を切らせて……」

「ありよ？」

「骨を断つー！」

「うわー！」

攻撃を受けた萬駆は一瞬で後ろに回って足元を蹴った。

「まだまだ甘いでござるな。」

その程度でこの獅子神萬駆に仕掛けてきたでござるか？」

「ちつくしよー！ アイシクルマシンガン！」

「スーパーバリアー！」

氷柱を乱射してくるが普通にガード。

「とう！ 手裏剣スペシャル！」

「そーれ！」

「おんげえ！」

上空から釘を投げるが、氷を投げられて撃沈。

「さあ、いづくぞー！ パーフェクトフリーズ！」

「な、なんでござるか？ 急に寒く。」

その後、萬駆は氷漬けにされてしまった。

フロストバイ・・・ト？（後書き）

第弐話からネタという……

次はいつになることやら

それでは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3251r/>

---

東方咎追録

2011年7月27日22時35分発行